エブラ文書における人名 Mikaya, Mikail

柴 山 榮

Eblaic Personal Names, Mikaya and Mikail

Sakae SHIBAYAMA

The purpose of this study is to investigate the possible historical continuity of the Eblaic personal names Mikaya and Mikail down to the Biblical names Mikayahu and Mikael, and also is to demonstrate the fact that those names in the onomasticon of Ebla reappearing in the Bible does not always authorize us to make the Eblaites the forefathers of Israel.

We would be well advised to discuss first the cultural and historical continuity in Mesopotamia and Syria, though the cultural continuity in Syria can be, in a sense, traced from Ebla tablets through the Ugaritic texts straight into the Bible as Dahood claims. It is too early to judge how much bearing these new finds in Tell Mardikh will have on biblical research, but from what little of the Ebla material have been published to date, the harvest is going to be much ampler than Dahood expects.

1975年のテル・マルディク (Tell Mardikh) 出土のエブラ文書中に Mi-ká-yà という人名をみるが (TM.75.G.336, r. II: 1, IV: 14), エブラ文書には人名語尾に -ya のつく人名をほかに現在のところ En-na-yà (TM.75.G.1764, r. III: 3, 22; TM.75.G.336, r. I: 2, IV: 5, 12, V: 6; TM.75.G.2238, r. XII: 25), En-na-ni-yà (TM.75.G.2075, r. V: 18), Iš-la-yà (TM.75.G.336, r. I: 9, 12), Pù-tá-yà (Ibid., r. II: 2, v. V: 10), Puzur-ra-yà (Ibid., r. III: 14, v. II: 10), Ti-la-yà (Ibid., r. IV: 3, v. III:

12, v. V: 7), Lu-a-yà (Ibid., r. IV: 15), Sí-mi-na-yà (Ibid., r. IV: 16), Ip-ḥur-yà (Ibid., r. VI: 19), Eb-du-yà (Ibid., v. II: 1, v. VI: 7), Ip-ṭur-yà (Ibid., v. V: 6), Ḥa-ra-yà (Ibid., v. V: 16; TM.75.G.1345, r. IV: 4), I-ša-yà (BA 39, 50b), Du-bù-ḥu-yà (TM.74.G.120, r. V: II: 03), Ì-da-yà (TM.75.G.2238, v. VI: 27), A-šu-ur-yà (TM.76.G.523, r. VII: 11), En-àr-yà (TM.75.G.1359, r. V: 1), Iš-má-yà (TM.75.G.1693, r. II: 4), I-ti-yà (TM.76.G.523, v. X: 20), Ni-ba-yà (TM.76.G.523, v. V: 28), Tām-ta-yà (Pettinato, *Ebla*, 270), Ti-ra-yà (Ibid.) をみ⁽¹⁾る。

ところでダフード (Dahood) は、このエブラ文書における動詞 +ya または名詞 +ya の形の人名における -ya を神名 Ya とし、これを MT における Yô (Yau, Yahû, Yahweh) と比較し、前26世紀のシリアには MT の神ヤーウェは存在していたとし、汎エブライズムを警戒すると自らいいつも、エブラ人名 Mikaya, Mikail における mi は西セム語のウガリト語、ヘブライ語あるいはエジプト語では “who?” とみることが出来るところから、両者即ちエブラ人名と MT の Mikayah, Mikael を比較して、エブラと MT が文化的同質あるいは文化的連続関係にあるとの有力な証拠の一つとしている。その際、エブラとメソポタミアとの関係は一切無視された形の論となっている。⁽²⁾ 本論はこれに対し、エブラ人名 Mikaya, Mikail (*catalogo*, 272) を取り上げることにより、彼の方法への疑義を明らかにしたい。

エブラ人名の動詞 +ya また名詞 +ya の形の -ya が神名であるか hypochoristic ending であるかについては、既にペティナート (Pettinato) が明確な論拠を示さずに、そうであるかもしれないと、むしろ慎重であり、ヴァイツマン (Weitzman) などは神名とすることに疑問を持っているし、ビッグズ (Biggs) は ia, yà が i, lí, ni とも読めることを示唆 (Ip-ḥur-yà を Ip-⁽⁵⁾ḥur-ni)。Mikaya の如く、-ya を -ni と読むことが意味上不可能なものはあるが、これはエブラ人名すべての -ya を神名とすることが可能であるかの如きダフード説への反論にはなっている。彼がエブラ文書は旧約聖書理解には何らの特別な関係にあるものではない、といい切っているのも (BA 43, 85), 一つにはフリードマン (Freedman) がダフードと同じような言語比較の方法

を行っていることに対していわれた言葉でもあるが、ビッグズのその論拠として、言語学的にも文化的にもエブラ文書については、前27—26世紀にかけてのマリ、アブウ・ツァラービーク (Abū Ṣalābikh) の文書との関係という歴史的な見方がこの場合重大であるとの指摘でもあり、メソポタミアとエブラとの同時代的関係を無視した論述への警告である。

さて、この -ya が神名であるためには、まず -ya が hypocoristic ending ではないのかどうかをみる必要がある。次のエブラ人名 Ḥa-ra-ya (TM. 75.G.336, v. VI: 6), Ḥa-ra-il (TM.75.G.10076, r. II: 2, IX: 8 77. 730, v. X: 8), Da(ta)-ḥír-Ma-lik (TM.75.G.1321, v. IV: 2; 3521, r. I: 1), Da(ta)-ḥír-Da-mu (TM.75.G.1342, r. I: 2), Da(ta)-ḥír-⁽⁷⁾a-da (TM. 75.G.1342, r. I: 2) における Malik, Damu, Il, Ada は神名で、これら人名は動詞+神名の形で、マリ文書 ARM IX 291: I: 30 の Ia-ḥa-ar-⁽⁸⁾IM, A-bi-ia-ḥa-ar と比べる事が出来、Ya-ḥu-úr-ri-ia (TR 27: 9), Ḥi-ra-a-ia (TR 232: 8) 等のリマ・タブレット人名と比べてみる時に、-ya は動詞+神名タイプの hypocoristicon で、神名とはみえない。さらに Īr-ì-ba (TM. 75.G.2353, r. IV: 11; 10106, r. I: 3; 336, r. VII: 2) Īr-ib-Da-mu (TM. 75.G.2349, v. XV: 3) をみると yirib-a, yirib-DN であり (UF 11, 277), -a はアモリ語人名における hypocoristic ending -a と比較できる。そしてマリ文書の Zi-ik-ri-Ištar (ARM IV 86: 17) は ARM V 71: 8, 22 では ka-pa-ar-ri ša be-lí-ia 即ち王室官吏 nāqīdu (ウガリトの nqd, MT の nōqēdh)⁽⁹⁾ の助手 (CAD K, 176 f) で、Zi-ik-ri-ia (ARM V 14: 4') と同一人と思われる。また Ḥa-ià-a-ià (ARM X 115: 3) は Ibid., 5: 7, 9, 14, 22; 113: 4; 135: 4 の Ḥa-ià-su-ú-mu, Ḥa-ià-su-mu-ú とは同一人 (Cf. ARMT X 274: 3)。したがって ia は Ištar, Sumu を表わしている。そこでエブラ人名の -ya が hypocoristic ending であることの可能性は考えられないことではない。

次に古アッカド語、古アモリ語人名における如くにエブラ人名にも、人名第二要素の神名が第一要素としての位置を有するものが見出せるかどうかだが、エブラ人名には En-na-Be (TM.75.G.336, r. II: 15), ^aBe-kà-na-na (TM. 75.G.2238, v. XI: 12), Sí-piš-ar (TM.75.G.336, v. VI: 5), Ar-ra-sí-piš

(TM.75.G.336, v. 1:2) 等を見るが、しかし *-ya* については神名として第一要素に置かれている人名を見ない。⁽¹⁰⁾ ダフドはエブラ文書における *‘Īa-ra-mu* (TM.75.G.522, v. II:2) とペティナートが読んでいるものを、ウガリト文書の人名 *ym* (KTU 4. 347:4, PRU 79) を MT の *Yôrām* (列王紀下8:16等) と比べた上で、*‘Ya+rm* の形と解するが、*Ya-ri-im-mu* (PRU III 12.34:15), *Ya-ri-im-mi* (PRU III 16.141), *Ya-ri-mi* (PRU III 16.252:12), *Ya-ri-im-ma* (PRU IV 17.248:5), *Ya-ri-ma-nu* (*Ugar.* V, 4:12', 5:27, 6:8, 16, 95:1, 11 等) をウガリト人名中にみると、これらは明らかに *rw/ym* (*UT* 19.2311) の *yaqtil* 形であり、ウガリト人名 *ym* は MT の *Yôrām* と比べるより、上述のウガリト文書中のアッカド語文書中の人名と比べるべきではないのか。そしてエブラにおける *‘Īa-ra-mu* が *‘Ya+ramu* とは考えられないことは、なにもウガリト文書と比較する必要はない。即ち、エブラ文書のテキストでは *‘Īa-ra-mu ar-mi^{ki}* として出ているが、これは TM.75.G.1764, TM.75.G.2075, TM.75.G.2238, TM. 75. G. 11010 の公的祭儀テキストにしばしば見られるタイプ。例えば *‘Ni-da-kul a-ru-kà-tù^{ki}* (TM.75.G.1764, r. IV:2—3), *‘Ra-sa-ap’ à-tà-ni-tù^{ki}* (Ibid., r. V:18—19), *‘Ra-sa-ap gú-nu⁽¹¹⁾* (Ibid., v. IV:3—4) にみる如く、*‘Īa-ra-mu* は全部が神名で、*ia* のみが神名ではないだろう。その点 *‘Šul-gi-ra-ma* (*MAD* 3, 15) の場合の、*Šulgi+rama*, 同じく *Mil-ki-ra-mu* の *Milki+ramu* タイプのものとは違う。またこの *ar-mi^{ki}* は TM.75.G.2231, r. X:5 と TM. 75.G.1591, r. XV:4' にみる地理名だ。また、*‘Ī-a-é-šu* (TM.75.2075, r. XV:10), これは神々のために捧げられた羊を記したテキスト中のもので、5 *udu ‘Tu* (Ibid., r. VIII:7—8), 2 *udu ‘Ī-lam* (Ibid., 26—27), 2 *udu ‘Ga-ra-i-nu* (Ibid., v. I:4'—5'), 2 *udu ‘Ku-ra* (Ibid., 23'—24') とあり、したがって *‘Ī-a-é-šu* は *‘Ya+ešu* でなく *‘Yaešu⁽¹³⁾* である。ここで少しつけ加えるが、註(3)における1976年のペティナートの見解は *‘Īa-ra-mu* に関して *Ya* が神名であることに慎重であるが、1979年の前掲 Pettinato, *Ebla*, p. 286 においては、*‘Īa-ra-mu* を人名と断定、*Ya è eccelso* の意味に解し (p. 269), 積極的に *Ya* は *Yau* (*Yahû*) と等しい神名たることを主張する。しかし人名における *-ya* は神名 *-il* に代って用いられるようになったものとす

る論も、アモリ人名等の多数例をみても、*-ya* を *hypocoristicon* ではないと否定出来るほどの説得力を持たない。また *ʾl̥a-ra-mu* がテキストの上から、これは人名であると断定するだけの証拠はいまのところ見当らない。例えば、*dub ʾl̥a-ra-mu 6 mu* (TM.75.G.1353, v. VIII: 1—3) は、テキスト最後のところだが、これは神のための供物のリスト・タブレットで、*Yaramu* という人物(書記)の記したものとは必ずしも解することは出来ない (TM.75.G.1376 と比較)。

ダフードが試みているウガリト文書の *ytm* (*Suppl. VT* 29, 106) を MT の *Yôtām* と比べ、エブラ人名の *-ya* とウガリト文書の *ytm=ya+tm* とこの3者をリンクするくわだても (*UF* 11, 142), *ytm* を *Ya is perfect* と解することを前提としている。成るほど TM.74.G.121, r. I: 1 には *tam-mim* (*tāmīm*) をみはするが、*ytm* は *jussive* と解することも出来る⁽¹⁴⁾ し、*yātōm* 即ち“父なし子”とも解し得る⁽¹⁵⁾。したがって、エブラ人名語尾 *-ya* が人名第一要素として用いられている例は、それと断定出来るものはいまのところ皆無であるといつてよい。

エブラ文書中の *Mikaya, Mikail* と比較しうる人名を MT の *MiKāēl* (ダニエル書10: 13, 21, 12: 1; エズラ記8: 8; 歴代志上5: 13, 5: 14等), *Mi-kāhū* (歴代志下18: 8), *Mikāyāh* (ネヘミヤ記12: 35), *Mikāyāhū* (歴代志下17: 7) に見るからとて、エブラ人名語尾の *-ya* を *ʾYa* となし、ヘブライの *Yahū, yāh* と考えてよいかどうか定かでない時、これらを直接結びつけて MT とエブラの文化的連続を語ることは、両者の文書間には少なくとも20世紀間の時間的隔りがあり、しかもダフードがこの両者を連結する役目を果たしているとするウガリト文書(前14—13世紀)には、これらと比較しうる人名が皆無であり、後述する如く、パレスチナには前8世紀まで16世紀間(一般的には *Mikael* は前5世紀以後に現われるが)、全くヘブライ史料に登場して来ない人名であるので、この長期の歴史的空隙をあたかも無いかの如くに人名の比較を行うことはたいへん問題である。

従来は、この MT の *mkyh(w), mkh, mk'l* は、アッカド語のテキストに出ている *Mannu-ki-DN* と比べられてきた⁽¹⁶⁾。これも抽象的な比較であるが、しかしメソポタミアとの関係においてこのエブラ人名をみることの重要性を示

唆しているといえよう。そこで本論では、現に手にし得るテキストにより、エブラ文書人名 Mikaya, Mikail からはじまり、主としてイスラエルのバビロン捕囚後のパレスチナで一般的にみられるようになる Mikayahû, Mika'elまでの人名をどのようにして迎えることが出来るのか、これを取り上げてみたい。

まずエブラ文書をみると、エブラ王国とメソポタミアとの言語学的、商業貿易、文化的関係の密なることが判明する⁽¹⁷⁾が、この場合ユーフラテス川中流から北及び南部メソポタミアと分けてみる時に、カルケシシュ北のウルシュ⁽¹⁸⁾との関係が深い（おそらくエブラ王国盛時の勢力圏北端）。そしてエブラ王国のパンテオンには ^aBa-li-ḥa (TM.75.G.2075, r. V: 25) の神名をみるが、これは地図上の Balikh 川地域にエブラ王国勢力が及んでいたことを示すものか。ちなみに ⁱ-mar^{ki} (TM.75.G.1591, v. XVI: 14), en ⁱ-mar^{ki} (TM.75.G.2075, r. IX: 25—26) 等、これら羊の捧げ物のテキストをみると、Imar はマリ文書にもみる E(I)mar^{ki} で、現在の Meskené でありユーフラテス川の港としてシリア、メソポタミア貿易の拠点の一つとして存在していたが、エブラ王国支配下にあったとみえる⁽¹⁹⁾。そして ^akà-pá-tù (TM.75.G.2238, r. VIII: 23) は Ḥa-a-pá-tù (OA 18, 105 n. 120)=Ḥep(b)at としてマリ文書に出ている (ARM X 92: 24 ^aḤe-ba-at) フルリ人の神⁽²⁰⁾ (RS 20.24: 16, Ugar. V, 18 ウガリトパンテオンリスト中の ^aḤe-bat), さらに ^aBARA₁₀-iš=Išhara (TM.75.G.11010, r. III: 30; 2075, r. VI: 20—21; 2238, r. VIII: 3—8, r. X: 8—9) は Kisurra の主女神⁽²¹⁾で、この地名は ki-sur-ra として古バビロン時代のリマ・タブレットに出ている (TR 119: 18; Ur III のテキストの ki-sur-ra^{ki}⁽²²⁾) が、フルリ語かもしれない⁽²³⁾。またエブラでは、^aA-dam-ma (TM.75.G.2075, r. VII: 24), Aš-tá-bi₅ (TM.75.G.1764, r. I: 19) などフルリ人の神々 (OA 18, 101, 102) の祭が行われている。かくしてフルリ人 (語) の足跡をエブラ文書の中にみることは、やはりメソポタミア北部との早期の交渉を語るものであろう。さらにメソポタミア南部との関係については、ファラ／アブウ・ツァラービークとの言語学的関係をゲルブ、ビッグズが夫々明らかにしているが、エブラ文書では Kiš^{ki} (TM.75.G.2238, v. VI: 7) への言及⁽²⁴⁾があり、これらとエブラとの関係は両者が前 3,000 年頃のものを共通に残していることによってもうかがわれる⁽²⁵⁾。したがって、エブラ人名の En-na-il (TM.

74.G.120, v. II: 7) についていえば, ウガリト人名 ḥnīl (PRU V 18. 84: 8) あるいは MT の Ḥ^ananēl (エレミヤ書31: 38, ネヘミヤ記3: 1等) と時間を無視して比較する前に, アブウ・ツァラービーク文書の En-na-il (AbS T 192, 274, 282, 344 及び IAS 34; Or 32, 61 n. 4), そして古アッカド名 En-na-il (A. 25412 xvii, プレサルゴンのアモリ人々名 MAD 3, 28) との比較をなすべきで, その時はエブラはウガリトを媒介として, MT とのみ似ているが如き方法は取れないことが判明する。

ゲルブ (Gelb) は, サルゴン時代の人名 Ma-maḥīr-sù をアモリ語人名の Ma-an-nu-ba-al-ti-DN の如くに, Man-maḥīr-sù で n>m assimilation と解し, したがってプレサルゴンのマリ王 Mim-ma-ḥīr-sù は Min-maḥīršu と読むべきだが, Ma-ma-ḥīr-sù=Man-maḥīršu をみるので, この mim-min は mi と読むべきを提示する (MAD 3, 173)。mi が mannu とともに既にアモリ語人名に存在していたことの説明としては些か苦しい。Ur III 人名 Mi-na-ar-ni は minū+ と解されているようだが (CAD M/2, 919), mi+nāru+ni を示唆したい。同じ Ur III 人名には Na-ar-Ea (“Ea は川なり”, UET5, 262: 6), ウガリトでも Ili-nāru (īD) (PRU III 16.158: 3) をみるので, Minarni=“われらの川は誰か?” の意味を持つ人名と解することが可能だ。また古アッカド人名 Mi-na-mu⁽²⁶⁾ は mi +namû であり, マリ文書の Ta-nu-uḥ-na-wu-um (TEM 4, vi: 21) 等, これら人名の第二要素 namû=nawû (牧草地) はマリ文書でしばしばみる (AHw 771)。ウガリトのアッカド語文書では Na-mu-ú (Syria 18, 243, 13; AHw 729b), Na-mu-ti (PRU III 16.148: 10') が人名として出ていることと合わせ, mi+nawûm と解することが出来よう。即ち, この mi(my, who?) は早い時期より, アッカド語 mannu (manna, Huffmon, op. cit., 231) と共にアモリ語人名に用いられていたとみられる。mi (my, who?) は通常ウガリト, ヘブライ, エジプト諸語に共通とされているが, ウガリト語文書をみると mi のほかに mn⁽²⁷⁾ も用いられていることは, mn.lik (KTU IV: 23) をみると判明する。⁽²⁸⁾

さて, サルゴン時代に Ma-an-ba-lum-^dDa-gan (MAD 3, 177), Ur III 時代には Ma-na-nu-um (BIN 9, 316: 22), Ma-an-na-tum (AHw 603), Ma-an-ni-ia (ARM IX 252: 25, 253: iii: 26) の古バビロン人名等, これらはい

ずれも $\text{mannu(a)} = \text{who?} + \text{hypoco. ending}$ である。⁽²⁹⁾そして Ma-an-ki-be-lí (*MAD* 3, 177), $\text{Ma-num-ki-}^{\check{\text{d}}}\text{Šul-gi}$ (*MAD* 3, 177), $\text{Ma-an-num-ki-}^{\check{\text{d}}}\text{Šul-gi}$ (*MAD* 3, 137, 178), $\text{Ma-nu-um-ki-}^{\check{\text{d}}}\text{AMAR-}^{\check{\text{d}}}\text{EN. ZU}$ (*UET* 5, 690 : 22), $\text{Ma-nu-um-ki-a-bí-a}$ (*KTS* 45b:3) 等, これらは mi+ka+il と同じ形の man(um)+ki+DN であり, 以下同じ意味と形のタイプの人名はメソポタミアでは時代を追ってしばしば見られる。

古アッシリアには $\text{Ma-nu-um-ki-a-bi}_4\text{-a}$, $\text{Ma-nu-um-ki-}^{\check{\text{d}}}\text{A-šur}$, $\text{Ma-num-ki-}^{\check{\text{d}}}\text{Ištar}$ 。⁽³⁰⁾古バビロン時代に入ると, マリ文書の $\text{Ma-an-nu-um-ki-ma-a-bí}$ (*ARM* IX 97 : 10, VII 240 : II : 11'), $\text{Ma-an-na-ba-al-ti-AN}$ (*ARM* II 107 : 9), $\text{Ma-an-nu-ba-lu-}^{\check{\text{d}}}\text{UD}$ (“誰が大陽神なしで存在しうるか?”, *ARM* VIII 92 : 10, IX 24 : II : 6, XIII 126 : 8, 22), $\text{Ma-an-na-um-ša-ni-im-ša}$ (*A.* 3151 : II : 29), Ma-an-ni-ya (*ARM* IX 252 : 25), Ma-nu-um (*ARM* VII 139 : 6)。また Ma-an-na-tum (*A.* 3151 : V : 49), Ma-na-tum (*ARM* X 2 : 6) 等の女性語尾を有する人名については Huffmon, op. cit., 133 (*CAD* M/1 214a)。マリ文書以外では $\text{Ma-an-nu-ki-}^{\check{\text{d}}}\text{na-}^{\check{\text{d}}}\text{Na-bi-um}$ (*CT* 4, 46 : I : 25), リマ・タブレットの $\text{Ma-an-nu-ba-lu-}^{\check{\text{d}}}\text{UTU}$ (*TR* 256 : 4, 259 : 8)。これら人名のうち mannu+ia(ya) の ia(ya) は, mannu+ki+DN または mannu+balu+DN の ki+DN , balu+DN の要素を表わしている hypoco. ending で,⁽³¹⁾明らかに神名ではない。また所有代名詞でもない。

⁽³²⁾*APN* (2200—606 B. C.) 中におけるアッシリア人名とされているものの中には $\text{man (maan, manna, mannu)+ki(ka)+DN(GN)}$ のタイプの人名が多く見られる (124—127)。これら神名の中には *KA.DINGIR.RA*, *Ištar*, *Ak (Nabú)*, *MAŠ(Ninib)*, *PA.KU (Nuska)*, *Ani*, *Aa* 等をみるが, いずれも上述のメソポタミアの伝統を踏襲した人名であり, 神名の代りに付された地名は, たとえば Mannu-ki-Arbail にみる如く, “誰が ⁽³³⁾*Arbail* 市の (神) のようでありうるか?” の意であろう。そして中期アッシリアの $\text{Man-nu-ki-i-}^{\check{\text{d}}}\text{A-ni}$ (*KAV* 26 : r. 20'), $\text{Man-nu-ki-i-}^{\check{\text{d}}}\text{[ND]}$,⁽³⁴⁾ 新アッシリアの Man-nu-ki-i-AD (*K* 1989, obv. 24', 33') をも加えることが出来る。

さて, 前1000年紀前半には, アッカド語に代ってアラム語が話し言葉としてメソポタミアで用いられるようになり, 前8世紀末頃までにはシリア全域にこ

れが拡大使用され、全中近東地域における lingua franca となったことは知られている。⁽³⁵⁾そして前5世紀にはアラム語はアラム人地域の範囲を超えて、非アラム語文化圏の多くの文学、言語を支配する言葉となり、シリア、パレスチナもこの例外ではない。⁽³⁶⁾またアラム人がバビロンへ入って来たのが前722年とされているが、前5世紀にはアラム人及びアラム語がメソポタミアにおける西セム語の多数派を形成していたことを念頭に置きつつ、そこで、本論にたいへん興味のあるテキストを提供してくれるのが、新バビロン時代のニップール出土のムラシュ（Murašū）文書である。⁽³⁷⁾この文書は丁度、エズラ、ネヘミヤ時代のユダへ帰還しなかったディアスポラユダヤ人達が、バビロンで商業実務に従事していたその同時代のものである。アラム人が初めて出現したのは Ur III 時代だとする見方もあり、⁽³⁸⁾アラム語はアモリ語から来ているとする大方の意見もあるのだから、エブラ人名の Mikaya, Mikail に関しては、カナン語あるいはウガリト、ヘブライ語のテキストよりも、アモリ語、アッカド語そしてアラム語を中心に考えるのが、今までみた限りの結果からいえば正しい方法といえるだろう。

ムラシュ文書には人名 Man-nu-ki-i-la-ḫi-i (*The Babylonian Expedition, Series A, vol. 9, 64 : 3*) をみるが、これはアラム語で Man-ki-'lāhī と読むべきことをクーガンは示唆 (Coogan, *West Sem. op. cit.*, 29. アッカド語の ḫ は西セム語の h-Zadok, *op. cit.*, 33)。即ちこの人名は Mi-ka-il に当る。つまり Mannu-ki-ilāḫi は、アッカド語人名のアラム語化といえる。さらに Man-nu-ki-i-la-ḫi-DINGIR (*Univ. Pennsylvania: The Museum Publ. of the Babylonian Section. II, I : 207 : 5*), そしてムラシュ文書人名中 Man-nu-tan-ni-ya-a-ma (*BM 12957 : 15*), Man-nu-ta-ni-^aYa-a-ma (*CBS 12986 : 2*) は Man-nu-dan-na-ya-a-ma (*UM 60 : 13, LoE*) と同じく、mannu+ではなくて Ma-at-ta-ni-ya-a-ma (Y. の賜物)であり、Ma-tan-ya-a-ma (*CBS 13089 : 1*) と同じ人名を表わす。⁽⁴⁰⁾そして Ma-tan-na-a-a⁽⁴¹⁾ は matan+a(ya) 即ち hypoco. ending で、Punic で mtn⁽⁴²⁾, matnā⁽⁴³⁾ として出ているものである。ところで、これら人名で共通の -ya-a-ma が明らかな神名であることは dingir の付されているものをみてもいえることだが、アラム語ではこれを yaw⁽⁴⁴⁾と読んでいたようだ。これはまた、^aYa-a-ḫu-u^aYa-ḫu-ú としてムラシュ人名第

一要素に出ている。例えば ⁽⁴⁵⁾ *Yā-a-hu-ū-na-ta-nu* (*UM* 97 : 7) 等。しかしムラッシュー文書では人名要素としては *Ṭu-ub-Ya-a-ma* (*BE* 10, 118 : 2) の如く *Ya-a-ma* が用いられ、*Mi-ka-Ya-a-ma* (*CBS* 12985 : 10', 13') もみるが、これらは言語学的にはいずれも MT の *Y^hôn-āt-ān* (サムエル記上14 : 8), *Ṭōbiyyāh* (ネヘミヤ記7 : 62), *Mikāyāh* (ネヘミヤ記12 : 35) と直接の比較が可能だ。

しかし、このムラッシュー文書では *Mannu-ki-Il* と *Mi-ka-Ya-a-ma* の両者が見られることをどう説明したらよいだろうか。一つには、*Mi-ka-Ya-a-ma* (*Yaw*) は捕囚のユダヤ人がパレスチナからバビロンへ持って来た人名と考えることである。すると、*Mika-Ya-a-ma* (*Yaw*) は捕囚前のユダヤ人ヘブライ語人名として存在していたものか。Herr がその字体からみて、ヘブライのものに間違いのないとしている前8世紀前半のパレスチナ出土の印章に *mykyhw* の名をみる。⁽⁴⁶⁾ さらに *mky* (*Ibid.*, 130, No. 111, fig. 60), *mk'* (*Ibid.*, 108, No. 57, fig. 57) をみ、サマリア・オストラカにおける人名の *-yaw* 要素は、ムラッシュー文書のものより3世紀も早い。これら人名の系譜をどのように迎れるものなのだろうか。まず *-y, -'* はいずれにしても神名ではない。既にパレスチナではヘブライ人名で神名を表わす時は *yh* または *yhw* が用いられてい⁽⁴⁷⁾ る。したがって、*mky, mk'* における *-y, -'* からみても、この *-y* は神名と解することは出来ない。

他方、アッシュールより出土のアラム語文書に *mng'sr, mng'rbl* (*CIS* 2, No. 20, Lipiński, op. cit., 86, 96, 98), *mngsr* (Lipiński, op. cit., 98; Herr, op. cit., 62, No. 2, アンモン印章, 前7世紀), *mng'nrt* 等⁽⁴⁸⁾ をみるが、これらアラム語人名はアッシリア人名 *Mannu-ki-Aššur, Mannu-ki-Arba'il, Mannu-ki-Ninurta* ⁽⁴⁹⁾ をアラム語読みしたものと判明する。⁽⁵⁰⁾ そこで *mn'* (Lipiński, op. cit., 86, obv. 4) は *mn-g-DN* の *mn+hypoco. ending* の形であろう。するとエブラ人名 *Mikaya, Mikail* は少なくとも、アッカド語もしくはアモリ語人名の中に引き継がれてメソポタミアに残り、ニップールにおいてアラム語化されて読まれ用いられて *Mikayaw* となったものではあるまい。*Ma-na-ki-i-Da-da* (*YOS* 6, 130 : 7), *Man-nu-ki-Da-da* (*YOS* 3, 41 : 14) は *mngdd* とアラム語で転記されたであろうし、明らかにアッカド語の影響無し

に N/LB-NA 時代の人名の mn-ki-DN タイプのものは存在しない (Cf. Zadok, op. cit., 428)。アラム語の mn はアッカド語の mannu の影響で出来たものだという事は、Man-nu-ka-se-’ (ADD 1186, r. 5) が Man-ki-se-’ (APN 124a) となっていることに明らかで、これは n が同化して Ma-ak-ka-me-e (OIP 2, 53 : 40) の形となり、mk+DN と子音表示される。⁽⁵¹⁾さらに Ma-an-nu-um-ge-ri-šu (ARM XVIII 55 : II : 2) > Mangērūš > Maggērūš > Magguruš > Magrus > Magarisi (AOAT 6, 233) をみる。故にエレファンティネ人名 mky は mnky にみる如く、mannu+ki+DN の hypoc. 形であり、myk’=mnky と考えてよい。⁽⁵²⁾そしてバルミラのアラム語人名 mkbl は mi-k-bl ではなくて mn-k-bl。また mkn’ は mn-k-nbw (Nabû) とみるのが正しい。⁽⁵³⁾エレファンティネの人名 ḥnny, ḥnnyh を並べてみると、-y は Yh(û) ではなく hypoc. ending である。したがって Punic 人名 mky (CIS 2198, 3) を mlkytn の略名とするベントは適当ではない。⁽⁵⁴⁾エレファンティネ人名の Yh(û) よりもニップールの Ya-a-ma は未分化で未発達の段階を示すとすれば (Coogan, *West Sem. op. cit.*, 53), これらから、ニップールの Mikayaw をエレファンティネもしくはパレスチナから由来した人名と考える方がよい。またムラッシュー文書中におけるエジプト人名がカンビュセス (Cambyases) のエジプト遠征の結果であると同じように、⁽⁵⁵⁾フェニキア人名も、これは新バビロンの征服による捕虜の人名として認めうるにしても、同じ名が Benz, op. cit. の人名中に見出せるものであるから、これはニップールにおけるフェニキア人の人名であるという論述には賛成しかねる。それは、Benz, op. cit. に mky (CIS 2198, 3) を見る故に、ニップールの Mikayaw はフェニキア人名であると断ずるようなものである。

以上をみると、アッカド、アモリ語人名において Mannu-ki-DN として古くからメソポタミアに存在していた人名は、前5世紀に至るまで継続してメソポタミアの歴史に現われている人名としてテキスト中にみることが出来る。しかも、アラム語がシリア、パレスチナ、メソポタミア等におけるいわゆる *lingua franca* となつてからは、原形とともに、これがアラム語化されて mn+g+DN の形で前8世紀にはシリアの Sefîre (アレppo南) 碑文でもみることが出来たが、前8世紀のパレスチナにおけるヘブライ人名 mykyh は、このア

ラム語化されたもののヘブライズムと考える。⁽⁵⁷⁾このことは、メソポタミアにおけるニップールの人名 Mikayaw (yaama) についても、ここニップールではアッカド語名としての Mannu-ki-DN はアラム語化された神名をもち、アラム語化されているが、ムラッシュー文書にそれと平行して mi-ka-ya-a-ma があらわれているのは、パレスチナにおける mykyh の影響ではなくして、アラム語による、mn-g-DN あるいは mannu-ki-DN のアラム語化のまたそのヘブライ語化とみた方がよい。

あるいはもう一つの可能性として考えられるのは、アラム語はアモリ語を源流とするということが上述の如くいえるとするなら、アモリ語人名の中に既に存在していた⁽⁵⁸⁾ mannu, manna, mi がメソポタミアで生存し続けたものが Mi-kayaw であり、この人名全体からいえばヘブライ語化であるが、あくまでもアッカド語もしくはアモリ語人名のアラム語化したもののヘブライ化(神名を代えた)であって、パレスチナからの直接のヘブライ語による移入ではないということである。ムラッシュー文書の他の人名、殊に捕囚後の人名にみられる MT の人名との類似は、捕囚前のバビロン (NB) 人名には Yaw, Yahû の神名要素は見られないにしても (Coogan, *West Sem. op. cit.*, 119), 必ずしもパレスチナからのものではなく、つまり西セム語(ヘブライ語)人名のアッカド語化人名ではなく、既にメソポタミアに何世紀にも亘って存在してきた⁽⁵⁹⁾アッカド語名もしくはアモリ語名の西セム語化、即ちアラム語化である。

エブラと MT をウガリトを媒介として結びつける方法に警戒を要すべきは、エブラ人名の Mikaya, Mikail は MT の Mikayah, Mikael へと、シリア→パレスチナと直接の西セム語同志の経路によるものではなく、むしろアッカド語→アラム語→ヘブライ語とメソポタミアからの経路あるいはアラム語を経ていることがみられる。また例えば、MT の族長名 Ya^aqōb (創世記 29:1等) の名は前5世紀ニップールの A-qab-bi-DINGIR. MEŠ (CBS 151 72, 4), Aq-bi-ya-a-ma (UM 27:5, 10), A-qu-bu (UM 115:11) と直接比較するよりも、ニップールのこれら人名はむしろアッカド語よりきている名であることをみる。即ち、Ur III では Iq-ba-nu-um (BIN 9, 316:15), 古バビロンでは Aq-ba-a-ḥu-um, Ya-qú-ub-AN, A-qú-ub-An, Ya-aḥ-qu-ub-êl, Aq-ba-da-di (以上 Huffmon, *op. cit.*, 204), Ia-aq-bi-^aIM, Ia-aq-bi-im, Ia-

qu-ba-an (以上 ARM XVI/1, 224—225), Aq-ba-a-ḥu (TR 322 : I : 24), Aq-ba-ḥa-am-mu (TR 25 : 14)。しかしウガリトでも Ia-qub-ba'al (PRU III 11.787 : 6), Ia-qub-ia-nu (PRU III 16.257 : III : 31) をみる。特に 'qb-の人名は MT では、捕囚後に多く見られるのでこの場合も、メソポタミアとの関係からこの人名をみるべきだ。MT とウガリトを結びつけてこの人名を考えるよりも、メソポタミアに古くから存在し伝えられてきたものが、ニップールにおいてアラム語を用いるユダヤ人によってアラム語化され (yaw など)、パレスチナへの流布をみる方が⁽⁶⁰⁾、一般化された 'qb- のヘブライにおける人名をみようとする場合 (BA 37, 11), より歴史的で現実的である。同じ見地から、フリードマンがエブラ文書に創世記14 : 2—8 の5都市名を読むと⁽⁶¹⁾いって、アブラハムを前3,000年紀中頃に存在した人物と断ずることの危険に対しても、たといエブラ文書テキストの読み方が正しかったとしても (ビッグズは読み方自体を問題視しているが⁽⁶²⁾), 性急すぎるといえよう。

以上をまとめてみよう。バビロン捕囚のイスラエルの民の人名は、必ずしもパレスチナからのものをその人名とせず、アッカド語名、またはアラム語名を用いていた。同じことはエレファンティネのユダヤ人についてもいえることで、ここでのヘブライ語人名はむしろ初期クラスのもので (Or 39, 464), 次第にヘブライ語及びその人名はここでは消滅し、パレスチナ伝統の人名を踏襲することが拒否され、存在はしても極く少数であったとの分析をみる (Ibid., 485)。したがって、エレファンティネにおける西セム語名、特にヘブライ人名にみるものは、むしろパレスチナからのものであるとの論は訂正されるべきであることをみれば、エレファンティネにおける mykyh, mky, mk' は、アッカド語よりのアラム語化されたニップールでの人名の前者はそのヘブライ化であり、後者はアラム語人名における hypoco. ending を付したものである。

即ち、ヘブライ語のアッカド語化ではなく、既にバビロン/ニップール、メソポタミア、シリアに何世紀にも亘って存在してきたアッカド語人名の西セム語化 (アラム語化)こそ、これが Mikayaw (yaama) であり、mykyh はそのヘブライ化である。前者が mn+g+DN としてシリアにアラム語化されて表記され読まれたものが、ヘブライ化されて mkyh として前8世紀のパレスチナ諸所でみられる人名であらう。捕囚前には MT にみられなかった Mikael⁽⁶³⁾

のほか、⁽⁶⁴⁾Šabb'tay (ムラシュエー, エレファンティネの人名によくみる) が、ディアスポラユダヤ人の間で、捕囚後一般的になったのが、バビロンとエジプトのシナゴグの発展と規を一つにしていることをみても、MT の Mikael は決してシリア (エブラ) →パレスチナの経路によるものでなく、Mikaya → Mikayah(û) の伝播経路も同様の経路は考えられない。したがって、メソポタミアの前1,000年紀の -ān, -ā, -ya 語尾をもつ西セム語人名は、直接にアモリ語及びウガリト語人名のコピーであるかの如き扱いは出来ないし、前1000年紀のシリア、メソポタミアの人名のコピーのようにみえるのは、アラム語(人)の媒介によるもので、ヘブライ人の捕囚による西セム語のメソポタミアでの流布によるものではない。⁽⁶⁵⁾まして、前1800—1650/1600 B.C. にシリアのエブラが最終的に滅亡した⁽⁶⁶⁾(Matthiae, *UF* 11, 563) この時まで、Mikaya, Mikail の人名がエブラに仮りに存在していたとしても、他史料でもシリアにおける存在を確認出来ないの、これらと前5世紀のニップールの Mikayaw (yaa-ma) との関係の説明なしで MT の人名と比べることは出来ない。⁽⁶⁷⁾

アモリ語人名においては -ya=a として hypoco. ending と考えられ (Huffman, op. cit., 135), エブラ文書においてもゲルブは -a を suffix personal pronoun と考えているが (SMS I/I, 22), ĩr-i-ba (TM. 75. G. 2349, v. VI: 11; 10106, r. I: 3), ĩr-ib-Da-mu (TM.75.G.2349, v. XV: 3), ĩr-ib-i-sar (TM.75.G.2402, v. II: 10) からみて、yirib-a は yirib-DN タイプの hypoco. の形、つまり、-a=DN=⁽⁶⁸⁾-ya と考えることが出来る。⁽⁶⁹⁾とすればエブラ人名 Mikaya あるいは他のエブラ人名語尾 -ya を常に神名 Ya として扱うことは出来まい。エブラ人名 Mikaya, Mikail がたとい、これがメソポタミアのものより古くからのものであるとしても、そして仮りに -ya が ⁴Ya であるとしても、決してパレスチナあるいはヘブライ人名の Mikael または Mikayāh(w) とは短絡して扱うことが出来ないことをみた。

註

- (1) エブラ人名テキストについては OA 17 (1978), OA 18 (1979), AfO 25 (1974/77), BA 39 (1976), Or 44 (1975), RSO 50 (1976) 及び UF 11 (1979) の未公開のもの、G. Pettinato, *Ebla: Un impero inciso nell'argilla*, Milano, 1979 等を引用した。エブラ文書年代については、本論を進める上で重要であるが、P. Matthiae,

- “The Excavation at Tell Mardikh-Ebla and their Historical Value”, *Annali di Ebla* 1 (1978), 19—30 ; P. Matthiae, “Recherches archéologiques à Ébla, 1977 : Le quartier administratif du Palais Royal G”, *Comptes Rendus de l'Académie des Inscriptions et Belles Lettres*, 1978, 204 及び 231, fig. 20, また 230にみる L. 2913発見の壺にみるエジプト王ペピ 1 世の名のある刻文, [mr] yt3wy nswt bilty s3 Ht-Hr nbt Iwnt Pp[y] (上エジプトと下エジプトの王, 二つの地の愛されし者, ハトルの息子, デンデラの貴婦人ペピ (ビュプロスの大女神ハトルについて H. C. Fisher, *Dendera in the Third Millennium B. C.*, New York, 1968, 37—54) をみる時, これらからペピ 1 世が前2332—2283年 (W. C. Hayes and W. Stevenson Smith, *CAH*, rev. ed. I, 1962, 400), または前 2312—2263年 (J. von Beckerath, *Abiss der Geschichte des alten Aegypten*, München, 1971, 20—21) とすると, 少くとも前2300年代をカバーするので, エブラ文書年代を BA 39, 48 のいう前2500年頃とするのがよいだろう (Cf. Biggs, BA 43, 1980, 81a)。
- (2) M. Dahood, “Ebla, Ugarit and the Old Testament”, *Suppl. to VT* 29(1978), 81—112, esp. 105—107 ; M. Dahood “Eblaic, Ugaritic, and Hebrew Lexical Notes”, *UF* 11 (1979), 141—146.
- (3) G. Pettinato, “The Royal Archives of Tell Mardikh-Ebla”, BA 39 (1976), 48—49.
- (4) C. Bermant and M. Weitzman, *Ebla: A Revelation in Archaeology*, London, 1979, 182.
- (5) R. Biggs, “The Ebla Tablets: An Interim Perspective”, RA 43 (1980), 82—83a.
- (6) D. N. Freedman, “The Early Story of the Ebla Tablets: Ebla and the Cities of the Plain”, BA 41 (1978), 143—164, esp. 149—150.
- (7) G. Pettinato, “L’atlante geografico del Vicino Oriente Antico attestato ad Ebla e ad Abū Ṣalābikh”, Or 47 (1978), 51—73 の地理名リスト TM.75.G.2136, TM.75.G.1591, TM.75.G.2231 と, R. Biggs, *Inscriptions from Tell Abū Ṣalābikh*, Chicago and London, 1974 の地理名リストとの比較。エブラとアブウ・ツェラービークのリストが Kish で作られ, 前3,000年 Jemdet Nasr 期より知られていた名を基にしていたものではないかということについて, BA 43, 84a ; G. Pettinato, “I testi cuneiformi della biblioteca reale di Tell Mardikh-Ebla: notizia preliminare sulla scuola di Ebla”, *Rendiconti della pontificia accademia romana di archeologia* 48 (1976), 47—57。かといって前3,000年紀よりのシリアとパレスチナとの関係を無視してよいわけではない (Cf. M. K. Buccellati, “Fertile Crescent Culture: North Eastern Connection of Syria and Palestine in the 3rd Millennium B. C.”, *UF* 11 [1979], 413ff)。
- (8) H. Huffmon, *Amorite Personal Names in the Mari Texts*, Baltimore, 1965, 204 で彼は HR を意味不明としているが, Fronzaroli, *UF* 11, 277 n. 13 では “choose”。
- (9) M. Dietrich, “Die Ug. Berufsgruppe der NQDM und das Amt des RB

- NQDM”, *UF* 9 (1977), 336—337.
- (10) そして名詞 +ya の形の人名では, Eb-du-yà (TM.75.G.336, v. II:1, VI:7), Eb-du-^aRa-sa-ap (TM.75.G.336, v. V:8), Eb-du-Ma-lik (*Orient* 44, 370), Eb-du-ni (*RSO* 50, 6f r. II:1, VI:7), Ḫa-ab-du-^aDa-gan (*ARM* VIII 6:12', 87:9'), Ḫa-ab-du-e-ra-aḥ (*ARM* VII 10:8, 140:r:14' 等) などから, -ya は所有代名詞ではない。
- (11) gú-nu について Dahood, *Or* 46 (1977), 230—232 は, ウガリト文書の ršp gn (*UT* 1088:2—3) と比べている (Dahood, *UF* 11, 144)。
- (12) J. N. Postgate, *Fifty Neo-assyrian Legal Documents*, Warminster, 1976, 103—104, 14.
- (13) P. Mander, “Aspetti del culto a Fara” *OA* 17 (1978), 4—9 (VAT 12626) のテキスト及び ^aTu を見よ。
- (14) S. Moscati, *L'epigrafia ebraica, antica, 1935—1950: Biblica et Orientalia* 15, Rome, 1951, index seal.
- (15) Y. Avishur, “Word Pairs Common to Phoenician and Biblical Hebrew” *UF* 7 (1975), 32; Cf. *UT* 19.1168 “fatherless”; 女性形 ymt (KTU 1.82:22). 人名 Ytm (KTU 4.618:3) を *UT* 19.168 は MT の yātôm (出エジプト記 22:21, 23; 申命記10:18) と比べ, “父なし子” と解す。ウガリト文書の ytm も MT の出エジプト記の yātôm も, 寡婦と平行して用いられているので (*CTA* 17-Aqht 2, V:8), ここは ytm を yôtâm と解することを避けたい。 *AfO* 25 (1974/77), 101—111 及び *OA* 18 (1979), 209—214 のベティナートによる神名リストにも, いまのところ ^aYa は勿論見出せない。
- (16) W. Baumgartner, *Hebräisches und Aramäisches Lexikon zum Alten Testament*, 3 Aufl., Leiden, 1974, 545b—546a
- (17) I. J. Gelb, “Thoughts about Ibla: A Preliminary Evaluation, March 1977”, *Syro-Mesopotamian Studies* I/I, 1977, 3—28; *BA* 43, op. cit., 76—85.
- (18) TM.74.G.102, r. 1:5, TM.75.G.2075, r. II:15 には du-du-lu^{k1}, 即ち Tuttul, *Ibid.*, 109, r. I:3 には Naḥur, *Ibid.*, 129, r. I:2 には Uršum, TM.74.G.102, v. I:5 には Mari 等, ユーフラテス川中流北及びバビロン川沿い, そしてカルケミシュ北と, このシリア, メソポタミア北部におけるエブラ王国の商業活動を知る。柴山栄「Uršu と Ebla」『オリエント』vol. XX, No. 2 (昭53. 3), 1977, 35—55 参照。但し, TM.75.G.2136 のテキストはエブラ王の支配下にある (in šu en eb-la^{k1}) 17国 (Kalam^{k1}) の名がリストされているが, この中に kà-ni-šu^{k1} (r. IV:1) をみるので, 西はアナトリアまでその勢力の及んでいることを知る。
- (19) M. L. Bierbrier, “The Date of the Destruction of Emar and Egyptian Chronology”, *JEA* 64 (1978), 136—137.
- (20) E. Noort, *Untersuchungen zum Gottesscheid in Mari: AOAT* 202, Kevelaer, 1977, 62 n. 1 and 144.
- (21) J. J. M. Roberts, *The Earliest semitic Pantheon*, London, 1972, 37; A. Renger, “Götternamen in der altbabylonischen Zeit”, *Heidelberger Studien*

- zum *Alten Orient*, ed. by D. O. Edzard, 1967, 164, 143—144 は、OB では Kisurra パンテオンには Išhara は入っていないと。アララクでは Tešub, Šimegi, Išhara の 3 神は特別な位置を持っている (AT 3 : 46)。E. Laroche, “Glossaire de la Langue Hourrite, Première Partie (A-L)” *Revue Hittite et Asiatique*, Tome 34, Paris, 1976, 126 参照。
- (22) D. O. Edzard, *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes: Die Orts- und Gewässernamen der 3. Dynastie von Ur*, Bd. 2, Wiesbaden, 1974, 104.
- (23) Roberts, *op. cit.*, 37 は、その語源は不明とする。
- (24) Ur III におけるマリとキシュとの関係については、J. Boese, “Mesanepada und der Schatz von Mari”, *ZA* 68/1 (1978), 6—33 の M. 4439 のテキストを参照。TM.75.G.1693, r. II : 2—4 はキシュの書記の手によるタブレットであることが示されている (dub-sar Kiš^{ki} Iš-má-yà)
- (25) *Or* 47, *op. cit.*, 60—73 ; *OA* 17, *op. cit.*, 166—177 及び R. D. Biggs and J. N. Postgate, *Iraq* 40 (1978), 106.
- (26) *An Akkadian Grammar: A Translation of Riemerschneider's Lehrbuch des Akkadischen*, Milwaukee, 1978, 44.
- (27) R. S. Tomback, *A Comparative Semitic Lexicon of the Phoenician and Punic Language*, Milwaukee, 1978, 174.
- (28) “Who has sent?” (C. H. Gordon, “Poetic Legends and Myths from Ugarit”, *Berytus* 25, 1977, 107).
- (29) G. Buccellati, *The Amorites of the Ur III Period*, Naples, 1966, 227.
- (30) 以上 W. C. Gwaltney, “Indices of Proper Names from the EL old Assyrian Texts”, *HUCA* 48 (1977), 45b.
- (31) J. Lewy, *Or* 15 (1946), 369 n. 9 で ya を vocalic と主張。サルゴン時代までは -i, Ur III より -ya, エブラ文書 -i を所有代名詞 (一人称単数) とする E. Affuso, “I pronomi di I e II persona in semitico egiziano e berbero”, *Annali* 37 (1977), 271.
- (32) K. Tallqvist, *Assyrian Personal Names*, Hildesheim, 1914.
- (33) Arbail について Parpola, *AOAT*, 6, 1970, 24. ; S. A. Kaufman, *The Akkadian Influences on Aramaic: Assyriological Studies* 19, Chicago, 1974, 5.
- (34) C. Saporetti, *Onomastica Medio-Assyria*, vol. I (I Nomi di Persona), Rome, 1970, 308.
- (35) M. H. Silverman, “Hebrew Name-Types in the Elephantine Documents”, *Or* 39 (1970), 467.
- (36) R. Zadok, *On West Semites in Babylonia during the Chaldean and Achaemenian Period: An Onomastic Study*, Jerusalem, 1977, 8.
- (37) *The Babylonian Expedition of the University of Pennsylvania*, Series, A, vol. 9, 13 及び Series D, 408—412; H. V. Hilprecht, *Expeditions in Bible Lands during the 19th Century*, Philadelphia, 1903; M. D. Coogan, *West Semitic Personal Names in the Murašû Documents: Harvard Semitic Monographs*

- 7, Missoula, 1976, 2; Coogan, *BA* 37 (1974), 6 は文書年代を Artaxerxes I (464—424 B. C.), Darius II (424—404 B. C.) の時代に置く。
- (38) A. Dupont-Sommer, “Sur les débuts de l’histoire araméenne”, *Suppl. VT*, 1953, 40—49; F. Vattioni, “Preliminari alle iscrizioni aramaiche”, *Augustinianum* 9, 1969, 310ff; M. Liverani, “Antecedenti dell’onomastica aramaica antica”, *RSO* 37 (1962), 65—76; D. J. Wiseman (ed.), *Peoples of Old Testament Times*: Chap. VI, The Arameans by A. Malamat, Oxford, 1973, 134ff.
- (39) Kaufman, op. cit., 23, 26; Zadok, op. cit., 241; L. Matouš, *ArOr* 26 (1956), 631ff.
- (40) M. D. Coogan, “More Yahwistic Names in the Murashu Documents”, *Journal for the Study of Judaism* 7 (1976), 200.
- (41) R. K. Porter, *Travels in Georgia, Persia, Armenia, Ancient Babylonia etc.*, 2, London, 1822, pl. 77g.
- (42) F. L. Benz, *Personal Names in the Phoenician and Punic Inscriptions*: Studia Pohl 8, Rome, 1972, 144.
- (43) M. Jastrow, *A Dictionary of the Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic Literature*, New York, 1967, 863b.
- (44) Coogan, *West sem.* op. cit., 105; Coogan, *JSJ* 7, op. cit., 200.
- (45) このほか -ya-ma, -a-ma, 𐤕𐤕𐤕 等, Yahwistic 神名の種々については M. W. Stolper, *BASOR* 222 (1976), 25; M. D. Coogan, “Patterns in Jewish Personal Names in the Diaspora”, *JSJ* 4 (1973), 184—191; M. D. Coogan, “Life in the Diaspora Jews at Nippur in the Fifth Century B. C.”, *BA* 37 (1974), 6—12.
- (46) L. G. Herr, *The Script of Ancient Northwest Semitic Seals*, Missoula, 1978, 79, 133, No. 119, Hebrew seal, fig. 61.
- (47) MT の ‘amāsā’, ‘māsāy, ‘āmōs は *masyāh の略名 (M. Noth, *Die israelistischen Personennamen im Lahmen der gemeinsemitischen Namengebung*, Hidesheim, 1966, 178—179)。同じく ‘atay, ‘ūtay は *tāyāh の略名, šim‘ā, šim‘āh は šima‘ba‘al の略名とすれば, -, -ā は hypoc. ending。Tel Arad (死海西) 出土のオストラカ書簡における大部分がヘブライ名における, -yahw 要素を持った人名 (前7—6世紀?) を D. Pardee, “Letters from Tel Arad”, *UF* 10 (1978), 326—331, 290 にみよ。
- (48) N. Avigad, “Seals of Exiles”, *IEJ* 15 (1965), 222—228.
- (49) J. A. Fitzmyer, *The Aramaic Inscriptions of Sefire*, Rome, 1967, 55—56; H. Tadmor, “A Note on the Seal of Mannu-ki-Inurta”, *IEJ* 15 (1965), 233—234; J. Naveh-H. Tadmor, “Some Doubtful Aramaic Seals”, *Annali* 28 (1968), 448—452.
- (50) アッカド語人名をアラム語読みする時は新アッシリアでは k→g (Lipiński, op. cit., 97—99)。
- (51) me-e は mi-i。Id-ri-mi にみる如く, 神名ではないか (Zadok, op. cit., 428 参照)。なお, 前8世紀におけるシリアのアラム諸王国について N. Na‘aman, “Look

- ing for KTK”, *WO* 9/2 (1978), 220—239.
- (52) W. Kornfeld, *Onomastica Aramaica aus Ägypten*, Wien, 1978, 58 の解釈参照。
- (53) J. K. Stark, *Personal Names in Palmyrene Inscriptions*, Oxford, 1971, 31.
- (54) Benz, *op. cit.*, 342 参照。
- (55) I.Eph'al, *Or* 47 (1978), 76—83.
- (56) Zadok, *BASOR* 230 (1978), 62b.
- (57) J. Hoftijzer and G. van D.Kooij, *Aramaic Texts from Deir 'Alla*; Documenta et Monumenta Orientis Antiqui, Leiden, 1976 によるガリリー湖南, ヨルダン渓谷東の Tell Deir 'Alla 出土のアラム語テキスト (700 B.C. ±25年, 96) では, テキスト II : 12 の mn n'nh (Who is sighing, 180, 236) において, mn が “who?” の意味で用いられていることをみる。なお A. Caquot, “Les textes araméens de Deir 'Alla”, *Syria* 54 (1977), 205.
- (58) エブラ文書人名には Iš- (I-zi, wd'='go out) 等古アモリ語がしばしば見られる。アモリ語人名中の Iš- については ARM XVI/1, 128 の人名を参照。
- (59) 但し古アモリ語の西セム語的性格について G. Buccellati, *The Amorites of the UR III Period*, Naples, 1966, 225—226.
- (60) MT 人名要素の -el も, それまでも人名に用いられていたが, イスラエル民の捕囚後の人名中に多用され一般化したということは, これもバビロンとの接触による影響であり, ムラシューではしばしば -el は用いられているのに, エレファンティネでは一回のみ出ている (*BA* 37, 12) ことをみても, ヘブライ人名中の -el 要素はバビロンより帰還のユダヤ人, バビロンとの接触からのものであることを証している。
- (61) N. Freedman, *BA* 40 (1977), 4; N. Freedman *BA* 41 (1978), 149—150.
- (62) R. D. Biggs, *BA* 431 (1980), 76f.
- (63) 捕囚前のヘブライ語は, 言語学的にはアラム語よりフェニキア語に近いとの説をなす Z. S. Harris, *A Grammar of the Phoenician Language*, New Haven, 1936, 1 があるが, この場合関係がない。
- (64) シャバト (安息日) からきた人名。
- (65) Mīkāhū (歴代志下18:8)=Mannu-ki-šu (Baumgartner, *op. cit.*, 546a) が, アラム語化を通してヘブライ人名となったのかどうかは分らない。
- (66) W. Helck, *Die Beziehungen Ägyptens zu Vorderasien im 3. und 2. Jahrtausend v. Chr.*, Wiesbaden, 1962, 147 ではトトメスⅢ遠征リストに 'e-b-ra の名をみ, アララク第四層のテキスト AT 182 : 5 には Ib-la の人のことが出ている。少くとも前15世紀には Ebla の名は存在していることをみる。
- (67) ニツプールの Mi-ka-ya-a-ma, Mi-ka-a-ma は Mi-ka-yah とヘブライ化されるが, 決して Mi-ka-ya と ya を神名そのものとしては用いない (*BASOR*, 222, 27 参照)。
- (68) Gī-bā-la=Gb'ly (KTU 4.177:2)。即ち -ya, -a が hypoc. であることを M. Astour, *UF* 11 (1979), 15 n. 25 でみよ。
- (69) P. Fronzaroli, “The Concord in Gender in Eblaite Theophoric Personal

Names'', *UF* 11 (1979), 227 n. 13. ムラシュー人名では -a (Mord^ekay) の如く hypoco. ending を持つ人名は多い。ムラシューの -a-a 語尾が人種, 地理名要素を表わすことあり, ウガリトの -y に当る。またこれらが人名として用いられることもある (Eph'al, *Or* 47, 82)。 (1980. 8 末脱稿)。

(しばやま さかえ: 日本基督教団調布教会牧師)

※なお人名については,

G. Pettinato, *Catalogo dei testi cuneiformi di Tell Mardikh-Ebla: Materiali epigrafici di Ebla-1*, Napoli, 1979 をも利用。

※脱稿後 Pettinato, *BA* 43(1980), 203f をみたが本論の結論に変更はない。